

尻の穴を舐めて出世する法  
— 曲説異文化比較考

廣川 謙一

アメリカでのビジネスマン生活も合計すると一九九年になります。アメリカ企業で働き始めた当初は右も左も分からずに手探り状態でしたが、そのうちに暗闇に目がなれるようにいろいろな事に気づき始めました。それを異文化比較と言つかは別として日本人として「違つな」と感じるが多くなってきました。異文化等と正面切つて勉強したわけではないので、今まで現場で集めた体験を、それも誰も話をされていないことを、ここで書いてみたいと思います。ですから、ここに書くのは当然のことながら「曲説」です。「正説」を期待されても私の能力をはるかに越えています……とのつけから言い訳しておきます。さて、アメリカの職場で働き始めて驚いたのは、言葉を聞いているとそこが職場か便所か分からない表現が多かつたことでしょう。たとえば、

I got pissed off. (俺ムカッと来たよ。)

That's bullshit. (そんなのナンセンスだ。)

This is a piece of shit! (そんなのガソクタだ。)

Tough shit! (無茶苦茶だね。)

You, shit-head. (川のオタンコナス。)

No shit! (冗談ださっ)ちなみに、この表現、ブッシュのジョークにはよく使われていました。

I am in deep shit. (やれやれ困つたことになった。)

日本の銀行の不良債権の処理の仕事をしているとき、外資は不良債権のことは a pile of shit 等と表現していました。丁度、NHKのク

ローズアップ現代で「不良債権は宝の山」外資が狙うビジネスチャンスの舞台裏」<sup>1</sup> という放送があつて取材を受けたのですが、「宝の山」がどうしても「糞の山」に見えてしまったのを覚えています。そういえば、映画「ジュラシックパーク」の中にも、女性科学者が恐竜の糞の山の中に手を突っ込んでいるシーンがありましたっけ。NHKの放映で外資が糞の山に手を入れているシーンで、思わずこのジュラシックパークのシーンを思い出してしまいました。<sup>2</sup> この当時、私は糞の山のバルクセルをしていました。上司からよく You've got to make your hands dirty と言われたものです。しばらく、手に残り香がついているように思えて困りましたっけ。

I got to cover my ass. (言い訳を言っちゃった。)

He is just sitting around with his finger in his ass. (あいつと来たが、ちんちんをさしてただけだ。)<sup>3</sup>

He is pain in the ass. (あいつは厄介な奴だ。)

You, asshole! (川のオタンコ野郎。)

I worked my ass off. (俺、一生懸命働いたんだ。)

まあ、汚いというか、臭そうというか。小便から、大便まで出るわ出るわ。

出るわ。

その上、日本で英語を勉強している時には使つてはいけなさと教えられた「性交」を意味する表現なんか当たり前に使われる。

I just f\*cked up. (たごつちやった。)

I screwed up. (ごべつちやった。)

<sup>1</sup> 一九九八年四月六日放映

<sup>2</sup> 取材にいられたのが武田真一アナウンサーで、今でもその後遺症で糞の山に手を突っ込んでいる姿を想像してしまい、NHKの7時のニュースを正視できないという後遺症に悩まされています。ごめんなさい。

<sup>3</sup> 周りから「ケツの穴が小さい奴だ!」という罵声を浴びたので、指でその大きさを確認しているだけかもね。

He is always screwing around. (あいついつもぶらぶらしているな。)

What the f\*ck! (何づじったー)

F\*ck it! (クソッ喰らえー)

F\*ck you. (お前なんかクソッ喰らえ。)

まあ、何と言いますか、開いた口がふさがらない人も多いのではないのでしょうか。

極めつけは、

He was promoted by kissing his boss's ass. (あの野郎、ボスのケツ舐めて出世じゃがった。)

日本語で言うゴマすりのことですが、ここまで来るといよいよスコトロジスト大活躍という感じです。気の弱い人だと顔を赤くしていることでしょう。ホントに。英語の引用はしませんが、アイツらケツの穴の舐めあいをしてる等という豊かな表現をする人たちまで出てくるのですから、アメリカの職場はほんとにスゴイ所です。特にアメリカの金融機関などに勤めていると、老若男女朝から晩までこのような表現の中で暮らしています。彼らの出身校等が日本で公表されたらおそらく多くの人たちがアメリカの一流大学に対する認識が大きく変わることに請け合いです。

日本でも標準語を話す地域では、これに類する表現をする所は少ないようですが、田辺聖子さんも書いておられるように、大阪弁になると、尻、糞、小便是三点セットのようです。ひょっとすると、文化的には大阪とアメリカは近いのかもしれませんが。東京の人が大阪に引越すとカルチャーショックを受けるとい話も聞きますから、まんざらこの考察も外れているわけでもないのかも知れません。

このような事に驚いているところ、日本の職場を活性化させるにはたとえばアメリカのGEのような活性化した職場を範として徹底的に学

ぶべきであるとビジネス雑誌に書かれていたので、「エッまさか！マジ？」と思わず日本人同士がケツの舐めあいをしている変態的な光景を想像してしまいました。やはり、我が同胞日本人には馴染まないように思えます。

また日本からアメリカの職場に転動したいという後輩からも問い合わせを受けました。後輩曰く、「英語がうまく出来なくては大変なんでしょうね。」確かに大変ですが、それより排泄物、下半身の表現を平気で使えるところまで心臓を鍛えることが同じくらい大事だ思い、「新宿あたりで成人映画のタイトルを二〇位集めて、それを人前で大声で読み上げる訓練をしてみたら？ 躊躇なく平然と読めるようになったら、まあアメリカの職場でも大丈夫かも。」それを聞いた後輩「…ちょっと考え直します…」

異文化比較あるいは異文化交流を専門にされている方々の説明を聞くと、日米の違いは宗教的な違いとか農耕民族・狩猟民族の違い、島国対大陸等が原因ということを言われるが、ケツの穴を舐めるという発想が、狩猟民族に由来するとも、あるいは大陸的発想であるとも、ましてや宗教的なものとも思えません。ひょっとすると性的嗜好とか幼児体験とかフロイトやユングの心理学に関係するのもかも知れません。ただ、今までいろいろな異文化比較研究をしている真面目な研究者の方に問い合わせられているのですが、今のところどなたからも真面目な回答がいただけないのが残念に思っています。

GEキャピタル等のアメリカの会社に勤務した後、日系企業を訪問してみると、皆さん上品なのに驚かされます。オフィスが静かなので、活気が感じられないといったら失礼でしょうか。上のようなあたかも汚物をオフィスで投げ合うかのように汚い表現を投げ合うような活気は見られません。双方遠慮しながら仕事をしている感じでしょう

か。また関西系の会社は関東系に比べると多少活気があるように感じられます。ただそれでも大阪で大阪弁で話されるような活気のある汚い表現を耳にする機会<sup>4</sup>はほとんどないといっても良いでしょう。

アメリカ人はここまで上司に対してつくすのに、残念ながら日本人の上司は三年くらいで日本に帰任してしまいます。したがって、ケツを舐めても舐め甲斐がなくながっかりしているのではないのでしょうか。上司とともに出世できるアメリカやヨーロッパ企業はともかく、日系企業に勤めているアメリカ人の従業員は舐め甲斐のあるお尻<sup>ケツ</sup>になかなかお目にかかれずに白けているように見えます。

上司に対してとことんつくす態度は、根回しにも表れているようです。日本の根回しに相当する意思決定のメカニズムはアメリカ企業にはないという事をいろいろな所で読みますが、私の調べた限り、GEでもHPでもAT&Tでも当たり前のようにあるようで、それ以外の一般の大企業でも当たり前のようです。実際、ウエルチ会長が私の目の前で私の同僚を解雇してしまった時の理由は事前の根回し不足。要するに、上司に公の場で恥をかかせることは法度だということのようです。というより、会議などの公の場で上司にいいカッコをさせるような演出を行うことが重要と考えているのでしょうか。したがって、アメリカ人は非常に細かい所まで気を使ってくれます。この部分の配慮は日本より肌理<sup>きめ</sup>細かいように感じられます。

\* \* \*

昔大学生だったころ、明治学院大学の堀内克明教授が編んだ「アメリカ俗語辞典」(研究社)を見て下品さに度肝を抜かれたことがあります。一九八八年に「大阪はたんつば」と発言した大物政治家があられました。大阪人は金儲けばかりに走り、公共心も選挙への関心も失くしてしまった。低俗な風俗産業も必ず大阪から生まれるし、大阪は眉をひそめることが多すぎる。大阪人には道を造るにも公共用の土地を提供する気持ちがまったくない。言葉は悪いが大阪はタンツポだ。」

す。ところが実際にアメリカに留学してみると、この辞典が非常に役に立ちました。アメリカでGEに就職してからは、気になった英語表現をこまめにメモったノートが手元に有りますが、最近見直してみたら興味「アメリカ禁句小辞典」<sup>知ると思わず使いたくなる</sup> 下品な表現集「<sup>興味</sup>本位版」<sup>使ってはいけない</sup> たいになってきました。まあ、グチャグチャ言い訳せんとマジで本にでもまとめてみようかな、チョッと臭うかもしれないけど在米日系企業活性化の黄金水<sup>コヤシ</sup>にでもしてもらおう！

《読んではいけない参考文献》

「試験にでない英単語」川村善樹著 講談社現代文庫

この本は人に貸す度に返ってこなくなるので、その都度購入している。もう五回は購入したか？ 最近は店頭から姿を消しているので貸し出す度に督促を入れる必要が出てきた。なぜかブックオフでも手に入らない。

「Enslight as a Second F\*cking Language」 Sterling Johnson Thomas Dunn Book 刊

副題は「How to swear effectively, explained in detail with numerous examples taken from everyday line」。確かに「毎日オフィスで聞いた言葉がよく網羅されている！」

「Watch Your F\*cking Language」 Sterling Johnson Thomas Dunn Book 刊  
続編。「ここまで語彙を増やせば、アメリカでのビジネス生活や日常生活は、教科書英語から「生きた英語」になるかも。さらに、日本人の先人たちが築き上げてきた上品で奥ゆかしい日本人から、「アメリカ人と変わらないじゃん」と言われる「新しい日本人」への脱皮が可能になるかも。

(二〇〇九年十月五日)

著者プロフィールは[こちら](#)へ

「質問、お問い合わせは[こちら](#)へ